

ユニバーサルデザイン授業

～発達障害等のある子どもを含めて、どの子にもわかりやすい授業～



京都府総合教育センター

ユニバーサルデザイン授業とは・・・

平成19年度に特別支援教育が法的に位置づけられ、各校（園）で校内委員会の設置やコーディネーターの指名などの体制整備が進められてきました。また、発達障害等の障害に対する理解も進んできました。

一方で、通常の学級担任が、障害のある子どもの特性に応じた適切な指導・支援を、40人の子どもたちのいる学級集団の中でどのように工夫していけばいいのだろうかと悩んでいる現状もあります。

平成24年7月中央教育審議会が「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」について報告を出しました。本報告では、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要である。」と述べています。

このような状況の中、「発達障害等のある子どもを含めて、どの子にもわかる授業づくり」をどうしていけばよいのか、その一つの方法として「ユニバーサルデザイン授業」の研究に取り組みました。これは、授業づくりに**特別支援教育の視点**を加味し、発達障害等のある子どもが学びやすいように授業を改善する、それが結果的にすべての子どもたちにわかりやすい授業になるというものです。発達障害等の有無にかかわらず、すべての子どもが、楽しく「わかる・できる」を目指して工夫する授業のデザイン、それがユニバーサルデザインの授業です。



特別支援教育の視点とは

特別支援教育は、子ども一人一人の指導や支援の内容が異なるということを前提とします。指導や支援の内容を考えるために、一人一人の実態把握が重要となります。

通常の学級には、教科学習の得意・不得意、意欲や理解力、学び方などさまざまな子どもが在籍しています。中には発達障害等により特別な支援を必要とする子どももいます。

一人一人の子どもを、どのような学び方を得意とするのか、なぜそのような行動をとるのかなど、その背景や要因にも目を向けて、肯定的に実態をとらえます。そして一人一人に応じた適切な指導・支援を考えることが大切です。



【特別支援教育の理念より】

障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。また、特別支援教育は、これまでの特殊教育対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害を含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである。さらに、特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。

（「特別支援教育の推進について」通知 19文科初第125号 より）

ユニバーサルデザインの視点

授業づくりに特別支援教育の視点を加味し、発達障害等のある子どもが学びやすいように授業を改善する、それが結果的にすべての子どもたちにわかりやすい授業になる

アセスメント

(1) 学級アセスメント (2) 気になる子どものアセスメント

チームアセスメント

学年や教科担任、特別支援教育コーディネーター等、複数の教職員による情報共有・分析



授業づくり

授業への参加

- チャイムと同時に始め、チャイムと同時に終わる。
- 教具をしまう場所やしまい方をわかりやすくする。
- BGMを効果的に活用する。
- 座席の配慮、グループ編成を工夫する。



など

内容の理解

- ねらいを明確にし、何を学ぶかを子どもがつかみやすい言葉で提示する。
- 何を考えたらいいのか、何をしたらいいのかがわかりやすい発問・指示をする。
- ねらいを達成するための発問を絞り込む。
- ペアやグループ、話し合いなど、さまざまな活動を取り入れる。

など

指導の基礎

- 指示は明確に、短く、はっきり、語尾まで言い切る。
- 活動をとめて、集中させてから指示をする。
- 声のトーンや教師の立つ位置を、子どもの立場で考える。
- 机間指導は、ねらいを明確にする。
- できている過程を褒める。

など

個別の配慮の工夫

授業を支える環境

物的な環境整備

- 教室前面や側面前方の整理
- 掲示物の精選
- 取組の「見える化」
- ルールの明確化

など

人間関係づくり

- あたたかい学級集団
- 一人一人が大切にされる集団
- 人権が尊重される集団
- 正しくあたたかい言語環境

など

学級経営

生徒指導

特別活動

教師の指導力・授業力の向上



すべての子どもがわかる・できる

ユニバーサルデザインの視点

授業づくりに特別支援教育の視点を加味し、発達障害等のある子どもが学びやすいように授業を改善する、それが結果的にすべての子どもたちにわかりやすい授業になります。

アセスメント

特別支援教育の視点によるアセスメントは、子どもの行動面・生活面の実態把握だけではなく、「必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べること」（京都教育大学教授 佐藤克敏 2006※）です。

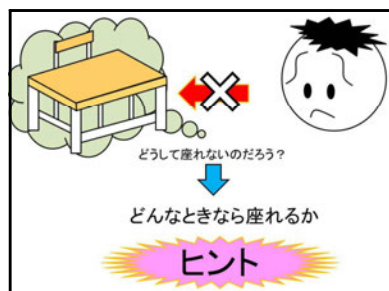
目に見える様子だけではなく、その背景にある苦手やつまずきの要因を把握し、必要な支援を検討し、その支援の成果を調べることでアセスメントです。実態把握（R）から必要な支援の検討（P）を経て行った授業実践（D）、その評価（C）と見直し（A）のR P D C Aサイクルの手順で行います。

※発達障害のアセスメント <http://www.nise.go.jp/portal/elearn/asesument.html>



学級のアセスメント

学級の子どもたちの関係はどうか、授業に集中できているか、発表や話し合い活動の様子はどうか、学習のルールは身についているかなど、学級全体の様子を把握することが大切です。



気になる子どものアセスメント

子どもができないことや問題行動を起こす背景にある「学び方」や「物事のとらえ方」に着目します。また、その行動はいつもなのか、ある特定の条件のもとで起きているのかなど、状況も確かめます。一方、できるときや問題行動が起きないときの状況についても確かめます。そうすることで、支援のヒントが見つかります。

チームアセスメント

得られた情報は、学年や教科担任、特別支援教育コーディネーター等の複数が、チームで共有し分析することが効果的です。

授業づくり

発達障害等のある子どもが授業に参加できなかったり、理解できなかったりする要因は、一つではありません。指示を聞き逃すなどして、今、何をしたらよいのかわからなかったり、手順や方法がわからず、しだいに集中力がとぎれてしまい、手遊びや私語をしてしまったりということも少なくありません。また、言葉だけの説明では理解しにくいという子どももいます。指示を正しく理解し、手順や方法がわかれば授業に参加することができ、少しの視覚的な支援をすることで理解ができるといった場合もあります。このような視点で授業づくり・改善をすることが大切です。

授業の改善を図る際のヒントを紹介します。



授業への参加

授業の初めと終わり

チャイムが鳴ると同時に授業を始め、鳴ると同時に終了するというルールが徹底されることで、子どもたちは意欲的に学習に取り組むことができます。ルールが守られるという正しいことが認められる集団の中で、子どもたちのやる気が生まれます。

座席の工夫

配慮が必要な子どもの場合、集中しやすい場所、支援が届きやすい場所など、一人一人の特性に応じて適切な座席配置を工夫する必要があります。また、隣の席やグループの子どもを誰にするのかによって、学習活動が効果的に進むことも多いです。

内容の理解

ねらいを明確にする

わかりやすい授業づくりをするためには、単元や本時のねらいを指導者がしっかりと設定し、どう具体化するかを深めておく必要があります。ねらいをしぼり込み、今日の授業で何を学ばよいか、子どもにとってわかる言葉で提示することが大切です。

発問をわかりやすくする

指示や発問は、どの子どもにもわかりやすいように練ります。子どもたちに何をさせたいのか、何のためにさせるのかを明確にしておくことが大切です。ねらいを達成するために、1時間の中での課題や発問をしぼり込み、子どもにわかりやすく伝えることが大切です。



板書をわかりやすくする

板書は視覚的な手がかりとして重要です。学級の子どもたちの特性を考え、効果的な板書計画を練ります。授業の流れや手がかりを視覚的に提示することでわかりやすくなります。色チョークの工夫やシンプルさ、「見える化」などの工夫ができます。色覚障害のある子どもがいる場合は、さらに配慮が必要です。

さまざまな活動を取り入れる

子ども同士の学び合いやペア学習、グループ学習を効果的に取り入れることにより、すべての子どもが学習に参加したり、自分の理解を深めたりすることができます。その際、話合いの視点や手順などを、具体的な行動レベルの言葉で提示することも大切なことです。

指導の基礎



指示の仕方を工夫する

子どもに指示するとき、内容を端的に、短い言葉で行ったり、視覚的な提示をしたりすることで、子どもは指示内容を正しく理解することができます。また、子どもが注目してから指示したり、作業をいったん中断させてから指示したりすると、聞き逃すことが少なくなります。

個別の配慮の工夫

授業全体を、わかりやすく工夫しても個別に配慮を要する場合があります。授業中の子どもの様子を見ながら机間指導を行い、個別に声をかけたり、ヒントカードを準備しておいたりするなど、一人一人の子どもに合った支援を行います。また、わかりにくさを予測し、事前に個別指導を行うことも有効です。

授業を支える環境

ユニバーサルデザイン授業は、授業づくりではあるのですが、学級経営や環境整備などに支えられるところが非常に大きいといえます。

物的な環境整備

教室の前面の掲示物やロッカーの中、机の配置など、子どもが集中して学習に取り組める環境にしていくことが大切です。発達障害等のある子どもにとっては、授業中に学習に向かっていても、音や動き、さまざまなものに注意が向いてしまうことがあります。環境を整えることで、学習に向かいやすくなったり落ち着いて生活を送ったりすることができます。環境を整えることは、発達障害等のない子どもにとっても「わかりやすい」環境となります。

またルールを明確にすることも、「わかりやすさ」につながります。話合いの進め方、発表のときのルール、ノートの書き方など、学校や学級のルールを明確にすることが大切です。

人間関係づくり

お互いを認め合い支え合う学級では、落ち着いて安心して授業を受けられます。安心で安全な学級、暴力的な言葉づかいや差別的な言葉づかいのない学級の中で授業を受けられるという基盤があって、子どもたちは自分の考えを伝えたり、自分にとってわかりやすい方法で問題に取り組んだりすることができるわけです。発達障害等の有無にかかわらず、お互いが認め合い支え合う学級づくりがとても大切です。

これらのことは授業場面に限ったことではありません。学校すべての取組の中で、明確化や「見える化」などユニバーサルデザインの視点を盛り込み、全教職員が一致して進めていく工夫をする必要があります。

教師の指導力・授業力の向上

「すべての子どもがわかる・できる」授業づくりのために、教師自身が指導を振り返ることが大切です。学校全体で、「わかりやすさ」に向けての意識改革を進めます。

福知山市立雀部小学校

特別支援教育の視点

- 1 子ども一人一人を肯定的に見て、肯定的に接すること
 - ・子どもの人格を尊重した丁寧な言葉づかいをする
 - ・子どもの行動に常に肯定的なフィードバックをする
 - ・よい行動を褒めて「間違いや失敗、難しさ」を否定的に見ない
- 2 子ども一人一人のわかり方の段階や苦手なことを把握しておくこと
 - ・子どもにあえて失敗させない
 - ・「できた」という経験を多く積ませる
- 3 子どもたちに学習の見通し（授業の目標や活動手順）をもたせ、主体的に動けるようにすること
- 4 「できた」「できない」の結果判断ではなく、でき方や間違い方のプロセスを見とること

アセスメント

第一次スクリーニング

（全員に対して学級担任が中心となって実施）



第二次スクリーニング

（第一次スクリーニングで対象となる児童に対して、特別支援教育部が中心となって実施）



<支援の実施>

タイプⅠ…多動傾向のある児童、落ち着きのない児童等

タイプⅡ…こだわりの強い児童、マイペースな児童等

タイプⅢ…学力の低い児童、理解に時間がかかる児童等

雀部小学校のユニバーサルデザイン （授業編）

コンセプト

『できるだけ多くの児童が高い意欲をもって学ぶ授業』

『できるだけ多くの児童が活躍できる授業』

『できるだけ多くの児童がわかる授業』

授業全体の構想にかかわるポイント

○学習の流れをわかりやすくシンプルにする

（授業者にも学習者にも）

○時間配分を考え中心課題にゆとりをもてる展開を組み立てる

○児童の優れている面を伸ばし、難しさの原因を見立てて具体的に指導する

○教科等の特性をふまえながら、学習の流れをパターン化する

○みんなにわかる授業づくり（ユニバーサルデザイン化）をした上で、個々のニーズに応じたパーソナル支援（バリアフリー化）を考える

A 授業の計画・展開の視点

★導入では、多くの児童が「参加できる」「わかる」内容を示し、見通しをもたせる工夫をする

★導入はシンプルにし、展開に十分時間をとるようにする

★わかりやすく、まとめの段階で児童が自己評価できる「明確なめあて」を提示する

★発問を十分に吟味する（より多くの児童が思考を深める発問・思考を広げる発問・新たな気づきを生み出す発問など）

★作業量は、モチベーションを保てる量にする

★何について書くのかを明確にし、発達年齢や学年に応じて考えを言葉でまとめる場を設定する

★体を動かして活動する場面（動）と、静かにじっくり取り組む場面（静）を、ねらいにそってバランスよく構成する

★ワークシートは児童の反応を十分予想して作成し、必要に応じてヒントカード等を工夫する

★基本的なノート書き方を示し、パターン化する

★評価は児童自身が振り返ることのできる内容にする



B 教師の指示・発問・動きの視点

- ★短くて具体的な指示をする
- ★必要に応じてナンバリングを活用して指示する
(2つ言います。1つめは～、2つめは～)
- ★活動に入る前に、終わったあとはどのようにすれば
よいか示しておく
- ★教師の立ち位置（ポジショニング）は、児童の立場
に立って決定する
- ★声のトーンや速さは、児童にとって落ち着くものを
心がける
- ★机間指導はねらいを明確にし、支援の必要な児童に
付くタイミングを考える
- ★教師は、児童のできていることを中心にプラスの言
葉かけをする

C 環境の視点

- ★授業の流れを示し、どのような順番で学習しどこで
終わるのかを明確にする
- ★作業や学習の手順は、板書で示すなど視覚的に理解
できるようにする
- ★板書は学習の流れをわかりやすくまとめ、文字の大
きさや行間に配慮する
- ★色チョークはポイントに使用する、アンダーライン
に活用する、罫線で囲むなど効果的に使う



全部ユニバーサルデザイン授業のスタイル

本時の授業づくりをはじめる前に

○実態把握・教材分析

○教師の思い(ねらい)

単元構想

授業スタイル

(前時までの思い出し)

①めあての提示

- ・本時の学習のねらいとなるもの
- ・まとめに直結するもの

②第一発問

- ・第二発問を深めるための発問
(どの児童も学習の土台に上げるための学習)

③第二発問(主発問)

- ・一番学ばせたい内容に直結する発問
& ねらいにせまるための発問

一人学び



みんな学び

④まとめ

- ・本時の学習を焦点化したもの
- ・めあての答えになっているもの

(スタート)

(ゴール)

指導案の例

第3学年
単元名「ありの行列」

過程	指導内容	形態	主な発問・指示 (指) 指示 (発) 発問	○指導上の留意点 ◎個に応じた手立て Ⅰ Ⅱ Ⅲ：配慮を要する児童への支援	教材・ 教具	評価
つかむ	1 前時の学習を想起させる。	一斉	(指) 前時の学習を思い出しましょう。	○「問い」と「答え」を確認し、「中」にはどんなことが書かれているか見通しをもたせる。	文章構成図	
	2 めあてを確認させる。	一斉	(指) めあてをみんなで言いましょう。		文章構成図 短時間で、端的な前時の振り返りを行う。	
	実験で、ウィルソンがわかったことは何か考えよう。					スタート
	めあての設定 学習のゴールが明確になるようにめあてを設定する。 (焦点化)			音読 音読のねらいを明確にし、指示しておく。	学習のゴールを明確にした、ねらいの設定	
	3 音読をさせる。	一斉	(指) 実験とありのしたことに気をつけて②③段落を音読しましょう。	○ぶつぶつ読みとリード読みをする。 Ⅲ：音読の準備が間に合っているか確かめる。 Ⅱ：近くで、読む箇所をとところどころ指示す。		
ふかめる	4 ありがしたことに線を引かせる。	個別			さとうの絵 巢の絵	
	(発)【1】ありはこのあと、どうしたでしょうか。					
	第一発問(活動) 第二発問に向かうための、書いてある内容を確認する発問		(指) ありがしたことに線を引きましょう。	○②段落の「この人」は誰かを確認し、筆者と実験をした人とは違うことをおさえる。 ○ウィルソンの実験の内容を確認する。 ○「ひとつまみ」「少しはなれたところ」の意味を確認し、イメージを共有化する。 ○全員でまずありがしたことを確認し、一人学習の手順を示す。 Ⅱ：「ありが」「ありは」の文を探すように助言する。	本文の拡大 掲示	
	5 劇化して、正しく読み取れているか確かめる。	一斉	(指) 確かめるために、劇をします。文章と同じ劇ができていないか確かめながら見ましょう。	○ありがしたことの文は動きがあり、その他の文は動きがないことを視覚的に確認する。 ○劇が正しければうなずき、間違っていればアドバイスをするなど、反応させる。 Ⅱ・Ⅲ：劇に集中できるよう、近くで見守る。	お面	
	第二発問(活動) いちばん学ばせたい内容に直結する発問					
	(発)【2】この実験でウィルソンは何がわかったのか考えよう。					
	6 実験の結果から読み取らせる。	個別	(指) ワークシートに、わかったこととそのわけを書きましょう。	○「外れていない」の意味を確認する。 ○文末表現の「のです」や、主語がウィルソンであることに着目させる。 Ⅰ：早くできれば、わけを考えさせる。 Ⅱ：不思議に思ったのは誰であるかを尋ねる。 Ⅲ：今、何をすればよいのか確認する。	ワークシート	③段落の実果と読み取っている。発表・ワークシート
			ワークシート 使用することのねらいを明確にし、記入する内容を検討することにより、意欲的に取り組むことができる。			
まとめる	7 たしかめの三択クイズを行う。	一斉	(指) 後から出てくるありの動きで、正しいものはどれでしょう。	○たくさんのありの動き方を三択で選ばせる。	ありの動きの図	
	8 本時の感想を書かせる。	個別	(指) 学習でわかったことや、大事だと思ったことを書きましょう。		ワークシート	ゴール

雀部小学校のユニバーサルデザイン (生活編)

コンセプト

『どの子にも学びやすく、
楽しく生活できる学校生活』

学校生活全体の構想にかかわるポイント

- 児童や教職員にとってわかりやすい学校生活の流れを構築する
- 入学期などを含め、発達段階を考え時間的にゆとりのある行動様式を考える
- 児童の実態をふまえながら、学校生活の流れをパターン化する(毎日決まった音楽や放送を流して活動を理解させる)
- みんなが生活しやすいスタイルづくり(ユニバーサルデザイン化)をした上で、個々のニーズに応じたパーソナル支援(バリアフリー化)を考える
- 「命」「人権」にかかわる事象に関して見逃さないアンテナを立て、どのようなことも報告・連絡・相談を行い、チームで指導にかかわるようにする



棚のカーテンは、「気持ち
が落ち着く」と言われる
色を選んでいきます。

くつのかかとをそろえる白ラインを
示しています。1年生も線に合わせると、
そろえやすくなります。



A 始業前の視点

- ★整理され落ち着いた教室である(ゴミがない、机が整頓されている)
- ★季節や天候に応じて窓が開き、空気の入替えができています
- ★黒板が美しい(日付や必要な連絡・言葉のみが書かれている)
- ★心のゆとりをもって児童を迎える
- ★宿題や提出物をどのように出せばよいかがわかりやすい
- ★座席と座席の間に適度な空間がある
- ★健康観察では表情にも留意して児童を把握する
- ★欠席児童やひまわり学級在籍児童についても呼名し大切に
- ★1日の予定や変更点についてわかりやすく伝える(必要に応じて文字で残したり、終了した内容を消したりと視覚支援を行う)
- ★朝読書の準備(読書袋)や開始を定着させている

B 休み時間・給食時間・掃除時間・パワーアップタイムの視点

- ★休み時間の児童の様子に関心をもち実態把握に努める(担任・担当に限らない)
- ★共に遊んだり話したりし、人間関係の構築に努める
(水曜日のふれあいタイム・遊びハンドブックの活用)
- ★授業の始まりと終わりの時刻を守り、児童の休む時間を確保する
- ★給食当番の役割を明確にし、仕事を最後まで見届ける
- ★「食」を通して、児童の実態把握や人間関係の構築に努める
- ★掃除当番の役割を明確にし、仕事を最後まで見届ける(掃除カードの活用)
- ★パワーアップタイムの課題を曜日ごとに理解させ、自主的に学習に向かえるようにする
- ★日直や係の役割を明確にし、仕事を最後まで見届ける

C 下校時あるいは下校後の視点

- ★1日の頑張りを認め、明日への意欲を膨らませて下校させる
- ★その日に起こったトラブルなどは、解決・整理して安心して下校させる
- ★明日の予定や家庭学習について、ていねいに理解させる
- ★その日の配布物など緊急以外は、朝のうちに職員室ボックスに入れ、担任は見通しをもって配布できるようにする
- ★安全に下校できるように発達に応じて指導を行う

児童・家庭の実態に応じて大切にポイント

- ★児童の実態に応じて、文字だけでなく「シール」「絵」「図」「写真」「ライン」「音声」などを学校生活において有効に活用する(靴箱・当番表・行動様式など)
- ★家庭の実態に応じて「ルビをふる」「ひらがなで文章を書く」「平易な言葉で保護者連絡をする」などの配慮をする
- ★行事や検診など普段と異なる環境になるときは、必要に応じて説明をていねいに行い、見通しをもたせることで不安や緊張を軽減する
- ★家庭での様子を尋ねながら、学校生活にうまく適応できる方法を相談する
- ★連携機関との相談を大切にし、よりよい支援を工夫する

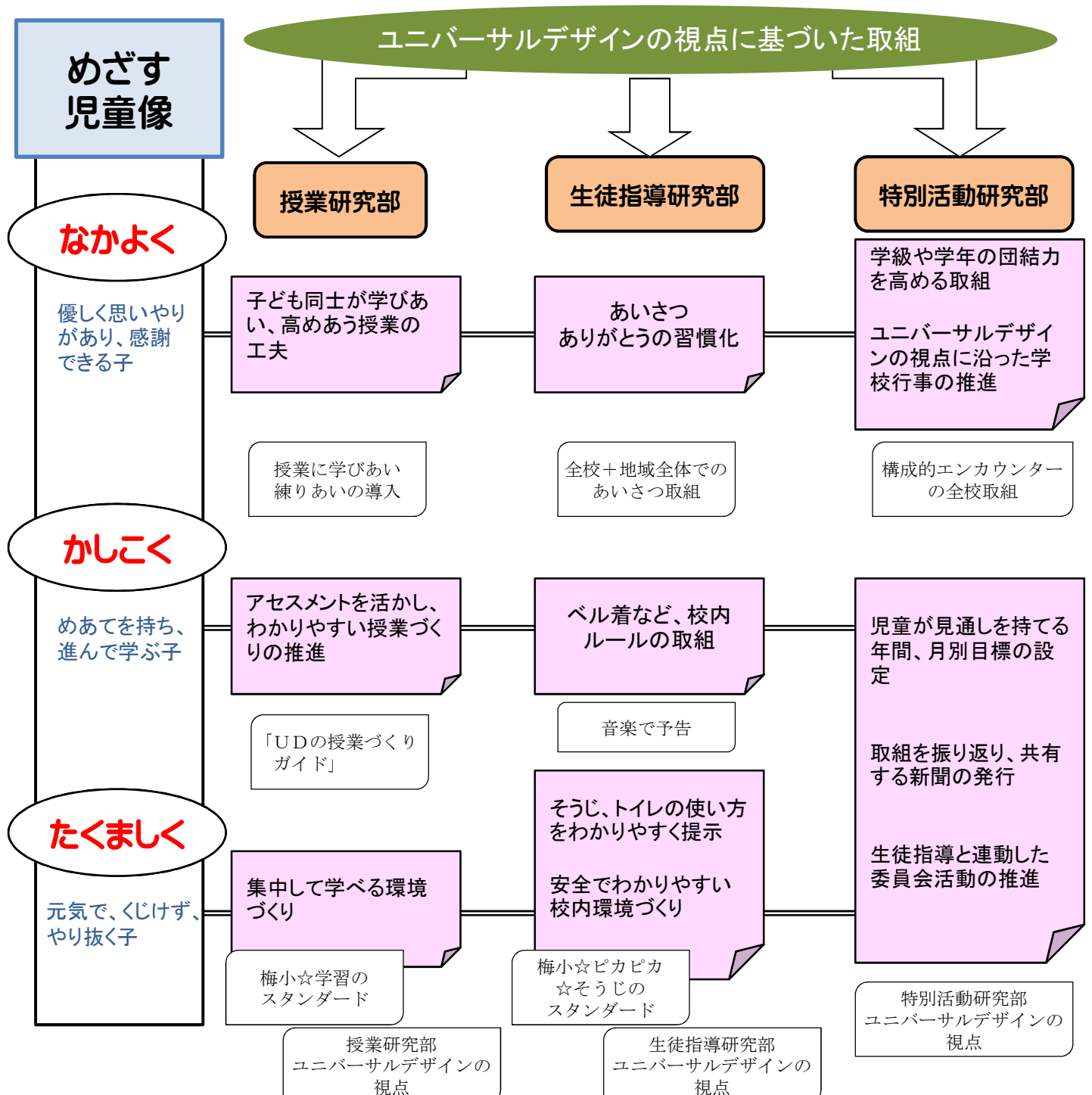
木津川市立梅美台小学校

学校教育目標

豊かな心と優れた知性を持ち、心身共に健やかに、
ひとり立ちできる児童の育成

研究主題

自ら気づき、進んで活動する児童の育成
～ユニバーサルデザインの視点を活かして～



特別活動研究部

取組方針

- 1 団結力を高めるための取組の推進
- 2 生徒指導研究部との連携に基づいた取組の推進
- 3 ユニバーサルデザインの視点に沿った取組の推進

生徒指導研究部との連携における留意点

- ・ 生徒指導研究部の年間目標や月別目標に沿った各委員会の活動配置
- ・ 必要に応じて取組を追加、修正
- ・ 児童の主体的活動の推進
- ・ 着地点がわかりやすい目標設定の提示

ユニバーサルデザインの視点

- 1 場所と人数を限定した取組になっているか
- 2 取組方法が周知徹底できているか
- 3 実施時間は、できるだけ短時間になっているか
- 4 内容はシンプルになっているか
- 5 指導者の取組に対する意識向上は十分か
- 6 取組期間終了後の意図はできているか
- 7 時間をきっちり守れているか、守れそうか
- 8 3Sが意図できているか
※3S→シンプル、ビジュアル(視覚化)、シェア(共有化)
- 9 児童主体の取組が展開されているか
- 10 目的・目標・着地点が明確な計画になっているか

生徒指導研究部

取組方針

- 1 目指す姿「う・め・み・だ・い※」に各取組を組み入れた、意識向上作戦の実行
- 2 特別活動研究部との連携に基づいた取組の推進
- 3 ユニバーサルデザインの視点に基づいた、自発的、短期集中的に取り組める活動の考案・実行

ユニバーサルデザインの視点

- 1 全教職員が同じ目標に向かって取り組めているか
- 2 児童にわかりやすい目標になっているか
- 3 目標を守ろうとする意欲がわいてくるか
- 4 掲示物は、視覚的にわかりやすく、掲示場所としても適当か
- 5 聴覚的に伝わりやすい工夫がなされているか
- 6 短期間、または一定期間等、期間を限定した取組になっているか
- 7 取組期間以外にも、モチベーションを維持できる声かけや工夫がなされているか
- 8 取組の結果が、児童に返せているか
- 9 目標やきまりを守ることの必要性や大切さが、児童に伝わっているか
- 10 児童の自発的態度や変容は見られたか
- 11 段階的に到達点が高く掲げられるような取組になっているか
- 12 やってよかった、守ってよかったという満足感や達成感が持てる取組になっているか

※ 目指す姿

う——うつくしい学校・そうじをがんばる子
め——めあてやきまりを守る子
み——みんななかよく助け合う子
だ——だいじなことをしっかり聞く子
い——いつも元気にあいさつする子

各部の取組

授業研究部

取組方針

- 1 めざす児童像「なかよく かしく たくましく」に、授業を通してせる
- 2 アセスメントシート等を活用し、児童の実態を把握する、その上で効果的な手立てを45分間の授業に組み込む
- 3 学習に向かうための「教室環境づくり」「学習ルールづくり」にも取り組む

ユニバーサルデザインの視点

- 1 授業の初めと終わりがはっきりしているか
- 2 本時の学習活動の内容を示しているか
- 3 教師の言葉遣いは丁寧で、はっきりしているか
- 4 活動するとき、書くとき、聞くときを分けているか
- 5 教室、子どもの机まわりは整理整頓されているか
- 6 テンポよく、ショートサイクルで授業を組み立てているか
- 7 時間を意識させているか
- 8 視覚的な手がかりを示しているか
- 9 子ども同士が学びあう工夫があるか
- 10 子どもに発言させているか
- 11 子どもに支援が届く工夫をしているか
- 12 わかりやすいワークシートを用意しているか

さらに具体的な手立てや方法「〇〇効果」を提示

「ユニバーサルデザインの視点」ができるまで
ユニバーサルデザインは特別なことじゃない？！

特に意識していなくても、すでに支援になっている取組を整理してみよう。

全校教員

わかりやすい授業のために
普段から心がけていることを用紙に記入

いろいろな取組や手立てがあるね。いくつか整理して分けられるかもしれないよ。(交流)

わかりやすいように、具体的手立てを示したり、支援方法を「ヒントカード効果」などの「〇〇効果」に分けてみよう。(整理)

見直し
改善

研究授業による効果の確認

どの学級でも実施して検証

第5学年 算数
単元名「合同な図形」

指導案の例

番号はすでに行っている実態把握項目との関連

タイプごとの具体的な支援の手立て(一部)

学級全体	配慮を要する児童		
	タイプA	タイプB	タイプC
学級全体として、授業に取り組む雰囲気導入のプリント学習を通して作る。 視覚的な情報、具体物の提示、具体的な操作活動を多く取り入れ、経験させながら学習できるようにする。 算数科では、課題が早く終わった児童から「ミニ先生」として、友だちにやり方を教えたり採点をしたりして、児童同士の学び合いを大切にする。	集中させる必要がある児童 ①児童の興味を引くような導入の内容を検討する。提示方法を工夫する。 ②簡潔にわかりやすい発問を考え、児童が取り組みたいと意欲を持てる学習課題を設定する。	学習支援を手厚くする必要がある児童 ①授業の初めに6問チャレンジプリントを行い、計算力がついてきていることを意識させ、自信を持たせる。 ②自力解決の際、活動の初めに、全体で思考の道筋をつけてから活動に入る。	発展的な学習への配慮が必要な児童 ①複数の方法を考えさせる。話し合い活動で積極的に発言させる。 ②③指名して発言させる。友だちの発言を詳しく説明させる。

本時の展開

過程	指導内容	形態	主な発問・指示・講話	指導上の留意点 ◎Ⅰ～Ⅲは各パートでの児童の活動 ◇ユニバーサルデザインの視点(効果)	教材・ 教具	評価
導入	・既習内容のたしかめ ・前時の振り返り	個別 一斉	指：前の時間に合同な三角形を描きましたね。その復習をします。 まず、プリントに名前を書きます。時間は5分間です。はじめましょう。 発：合同な三角形を描くにはどんな方法がありましたか。	◎Ⅰ：三角形の作図をする。 ◇授業定刻開始効果 ・既習内容を振り返り、学習時間への切り替えを行う。 ◇ショートサイクル効果 45分の授業を、子どもの集中時間に合わせ3つ程度に分割した。それぞれを「パート」と呼び、各パートでの児童の活動を明確にした。	問題プリント	
展開	・めあての確認 ・四角形の作図 ・速く正確に描く方法 ・全体交流 ・四角形の作図法	一斉 個別 グループ 一斉 一斉	発：合同な四角形を描こうと思います。どこを何を使って描けばよいですか。 指：プリントに左の四角形と同じ四角形を描いてみましょう。 指：3人グループで描き方を交流します。 指：紹介し合った中で速く正確に描けると思う方法を話し合っ一つ決めます。 発：どんな方法で作図しましたか。 指：「コンパス作戦」「コンパス分度器作戦」の2種類の方法で描いてみましょう。	◎Ⅱ：四角形の作図の仕方を考え、話し合いに参加する。 合同な四角形のかき方を考えてかこう。 ・「コンパス作戦」「分度器作戦」「分度器・ものさし作戦」の描き方を押さえる。 ・辺BCから残りの頂点、角度についてコンパス、分度器、定規を使って作図することを確認する。 ・何をしたいかわかりにくい児童にヒントカードを与え助言する。 ◇丸つけ効果 全：合同な四角形を自分なりの方法で描いている。 全：合同な四角形の描き方を考えて話し合っている。 ◇3人グループ効果 ・作図方法に一つの正解があるものではないことを伝えておく。 ・三角形の作図を応用できることに気付かせる。 ◎Ⅲ：合同な四角形を作図する。	デジカメ 学習プリント 画用紙マジック デジカメ	評価規準：三角形の作図の考え方を使って、四角形の作図の方法を考え、作図している。(技能) 十分満足できると判断される状況 合同な三角形のどの作図法に基づいて描くか、見通しをもって作図している。 努力を要する状況への手立て 作図の仕方について途中まで示したヒントカードを用意し、必要に応じて活用するよう個別に助言する。
まとめ	・まとめ	一斉	講：三角形の描き方をもとにして作図すれば、四角形を速く正確に描けることがわかりましたね。	・四つの辺の長さだけでは、形が決まらないことを押さえる。	四角形の模型	

授業づくりに関する具体的な流れ

アセスメント

- ◆学級の様子、子どもの苦手や得意を把握

アセスメントシート

学級の子どもの特性や傾向を明らかにするツール

タイプ別傾向を把握

学級全体の様子や気になる子どもの様子を概観し、チームでのアセスメントに活かす

アセスメントシート(一部)

名前	多弁多動	暴言暴力	不注意	衝動的な行動や発言 (考えるより前に動く)	集団行動困難 一斉指示に従うことの困難	友だちとのトラブル コミュニケーション問題	パニック	こだわり	興味関心のかたより	極端な偏食・触覚過敏・聴覚過敏	不器用	全般的な学習の遅れ	読み書き計算が全体的な発達に比べ極端に苦手

タイプ別表

タイプ	行動の様子
A	落ち着きがなく、集中することが困難である。
B	理解に時間がかかる、学習の積み重ねが不足している。
C	発展的な課題ができる。早くできたり、課題が簡単すぎると手持ちぶさたになったりすることもある。

授業づくり

- ◆全校で支援の方法を検討し整理して共有

ユニバーサルデザインの視点

テンポよく集中力が続く授業展開とする「ショートサイクル効果」等、さまざまな工夫を集約

学習指導案の工夫

ユニバーサルデザインの視点やショートサイクルに留意した学習指導案

ユニバーサルデザインの視点(一部)

ユニバーサルデザインの視点	具体的な手だてと補足説明	関連する効果
1 授業の初めと終わりがはっきりしているか	- 教師は開始前に教室にいて、定刻通り授業を開始する。フラッシュカードや辞書引きといった、前時からの学習を活かし、仮に遅れた子がいたとしても、授業にすぐ参加できる内容となっている。 - 授業終了時刻を示す。 - チャイムと同時に授業を終える。	授業定刻開始効果 フラッシュカード効果 辞書活用効果 授業終了時刻 指示効果
2 本時の活動内容を示しているか	- 本時に、何がどれだけできればよいのか明らかに示す。 - 本時、または単元を通して学習の必要性や、どのような状態を目指すのかを明示することで児童の意欲は高まる。	学習活動指示効果 めあて・評価の必要性明確化効果
3 教師の言葉遣いは丁寧で、はっきりしているか	- 指示は明確に。短く、はっきり、語尾まで言い切る。 ◎「～しましょう」「～しなさい」×「～してください」 ・問いかけ「～でしょうか?」と指示「～しましょう」「～しなさい」は区別できているか。	指示明確効果

環境づくり

- ◆全校で教室環境のアイデアを共有

梅小☆学習のスタンダード

授業のルールをわかりやすく解説し、子どもたちに提示定期的に評価を行い、やる気を引き出す

梅小☆学習のスタンダード(一部)

	ルール	合格ライン	月	火	水	木	金
1	次の授業の準備をする	授業開始時に必要なものがそろっている。					
2	チャイムが鳴ったら、「キンコンカンコン」の「コン」が鳴り終わったときに座っている。音楽が終わったときに座っている。	「キンコンカンコン」の「コン」が鳴り終わったときに座っている。音楽が終わったときに座っている。					
3	自分の席に座って学習をする	45分間、先生の指示がない限り、自分のいすに座っている。					
4	「はい。～です。」と言う	呼ばれたら「はい。」と言う。終わりに「～です。」と言う。					

見直し

- ◆全校で行う授業改善

児童へのアンケート

授業後に「参加できたか」「わかったか」を児童に直接確かめる

ユニバーサルデザインの視点実施カード

研究授業後に自学級の授業で効果を確認し、全校で共有

ユニバーサルデザインの視点実施カード(一部)

授業の初めと終わりがはっきりしているか	- 授業の初めに両手を開ける動作をして、初めのジェスチャーをすることで、学習の意欲が高まった。その後、タイマーをセットし、タイマーが鳴ったら終わりのジェスチャー（両手を閉じる）をすることで、見通しが持てた。 - いつも実施している。 4月から実施。メリハリがあってよい。 - 号令を必ずかける。はじめがつく。 - チャイムで始めてチャイムで終わる。教師のあいさつを明確にする。 - 学習時のほどよい緊張と、休み時間の楽しい様子の区別がつきやすい。
---------------------	--

ユニバーサルデザイン授業の指導案づくりの手引き

〇〇科学習指導案

指導者 〇〇〇〇

- 1 日時 平成〇年〇月〇日（〇） 第〇校時
- 2 対象 第〇学年〇組 （男子〇名 女子〇名 計〇名）

3 場所

4 単元名・教材名

5 単元の目標

6 単元の評価規準

7 単元について

(1) 教材観

(2) 児童の実態

【学級全体】その教科における学級全体の実態を記入
【配慮を要する児童】
①支援のタイプに合わせて3タイプ程度に分ける
*タイプ分けをするのは、支援の手立てを明確にするためである。
②支援のタイプが明確になるように特性等を記入

学級全体	配慮を要する児童		
	タイプⅠ	タイプⅡ	タイプⅢ

児童の実態とリンクさせる。
「こういう実態であるから、
このように指導する」

(3) 指導観

学級全体	配慮を要する児童		
	タイプⅠ	タイプⅡ	タイプⅢ

8 単元の系統性

9 指導計画

10 本時におけるユニバーサルデザインの視点

より多くの児童がわかりやすい授業をつくるために、授業者が組み込んだことを明記する
(焦点化・視覚化・共有化など)

11 本時の目標

12 本時の展開 (○／○)

過程	指導内容	形態	主な発問・指示	○指導上の留意点 ◎個に応じた手立て (ⅠⅡⅢ 配慮を要する児童 への支援)	教材 教具	評価
つかむ	1			支援児童への手立てを 具体的に記入する。		
	2					
	3	【めあて】				
				【めあて】 児童が具体的にイメージ できる文言で設定する。		
ふかめる				【発問】 本時のねらいを達成する ためにしぼり込む。		
まとめる						

特別支援教育の推進

京都教育大学 教授 佐藤 克敏

特別支援教育は、「一人一人のニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行う教育」です。

一人一人のニーズに応じるためのキーワードは3つだと思います。一つ目は個のニーズ、できることやできないこと、認知能力の偏り、得意なことや不得意なこと、行動の特徴や傾向、本人の希望や好みなどを知ることです。二つ目は、ニーズに応える環境、教室など周囲の物理的な環境、学校などの人的な資源の状況、周囲の人の対応の仕方、課題や教材の問題解決に必要な要素などを知ることです。三つ目は、環境と個人の相互作用を知ることです。その子どもがおかれている環境、周囲の人の対応、教材等に対してどのように振る舞っているのか、子どものニーズと環境が合っているのか合っていないのかについて知り、必要があれば修正することになります。

ユニバーサルデザインの視点をもった教育も同様のキーワードをもつように思います。教育においてユニバーサルデザインという用語は、現段階では必ずしも共通の定義と認識で用いられていません。個のニーズを出発点として「すべての子どものわかる・できる」について検討する場合もあれば、環境、特に教材を出発点として「すべての子どものわかる・できる」について検討する場合もあります。起点は取り組む教員の良さや学校の抱える課題によって異なるでしょう。取組を進める中で、三つ目にあげたキーワードの視点を加えることが重要だと考えます。

この研究に取り組んでいただいた2つの小学校もそれぞれの学校の長所や課題を活かした取組です。子どもの長所に着目した「わかる・できる」だけでなく、教員や学校の「わかる・できる」も起点とすることが重要であると思います。

参考となる京都府総合教育センター刊行物・コンテンツ等

- ・LD、ADHD、高機能自閉症等へのサポートマニュアル「ちょっと工夫してみませんか？」（平成15）
- ・LD、ADHD等教育コンテンツ（平成16）
- ・自閉症のある子どもへの支援ガイドブック（平成20）
- ・先生わかってな（平成22）
- ・特別支援教育ガイドブック読める！書ける！～すべての子どもが楽に読み書きを学ぶために～（平成22）

平成23・24年度特別支援教育部研究プロジェクト「通常の学級におけるユニバーサルデザイン授業の研究」

＜研究協力校＞

福知山市立雀部小学校 木津川市立梅美台小学校

＜研究スタッフ＞

佐藤 克敏	京都教育大学	教授	研究助言者
奥野 栄子	福知山市立雀部小学校	教諭	研究協力員
栗津 京子	木津川市立梅美台小学校	教諭	研究協力員
村上 英美子	京都府スーパーサポートセンター （京都府立宇治支援学校）	教諭	研究協力員
西垣 博	京都府立中丹支援学校	教諭	研究協力員
小林 豪	京都府立中丹支援学校	教諭	研究協力員
中上 瑞恵	京都府立南山城支援学校	教諭	研究協力員
小角 令子	京都府立南山城支援学校	教諭	研究協力員
松本 亜希子	京都府立南山城支援学校	教諭	平成23年度研究協力員
高橋 広行	京都府立八幡支援学校	校長	平成23年度特別支援教育部長
鋒山 智子	京都府総合教育センター	特別支援教育部長	
大森 直也	京都府総合教育センター	主任研究主事兼指導主事	
畑中 佳美	京都府総合教育センター	主任研究主事兼指導主事	

* 本研究の詳細については京都府総合教育センターのホームページに掲載しています。http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/